

## 日本化学会第 61 春季年会報告



慶応義塾大学工学部 平島 碩

日本化学会第 61 春季年会は 1991 年 3 月 29~4 月 1 日、横浜市の慶応義塾大学日吉キャンパスで行われた。100 年以上の歴史を持つ、会員数 35,000 のマンモス学会らしく、参加者数（登録者）約 8,000 人、研究発表も 41 会場で講演約 4,300 件のほかポスター・セッションもあり、講演座長だけでも 800 人という大規模のものであったが、例年のごとく、コンヴェンション業者の手を借りてトラブルも無く運営されていた。

材料関係については 1 つの会場で 4 日間にわたり、約 140 件の研究発表が行われた。ガラス関係の研究発表はこの会場では約 10 件と少なかった。中ではガラス中の高イオン伝導性の  $\alpha$ -AgI 結晶の常温凍結関連 3 件（阪府大工・南等）が目ざされた。筆者等もかつて報告した、 $\text{PbTiO}_3$  高温相が結晶化ガラス中で室温まで凍結される「マイクロランピング現象」と基本的に同じと思われ、一種の懐かしさを感じさせた（Nothing new under the sun!）。高イオン伝導ガラスおよびガラス・セラミックスについては河村等（北大理）、松口等（愛媛大工）の発表もあった。その他、ガレート・ガラスの構造（京大工・化研・忠永等）、オキシフルオライド・ガラス（京工繊大工芸・浜田等）など散発的で十分なディスカッションは見られなかった。ゾルーゲル法関係の報告はガラス関係より多く、ポリチタノシロキサン構造、ハイブリッドゲル（共に東理大・阿部等）、高分子ゾルーゲル系の変調構造（京大工・中西等）のほか薄膜、コンポジットの報告が多かった。CdS 等の微粒子分散ガラスの光学特性（阪府大工・峠等、東北大工・山崎等、松下中研・棚橋等、など）、光導波路（九大総理工・吉開等、横浜国大環境所・新倉等など）

など新しい光学材料の開発が盛んであることを示す発表も目立った。ガラス、ゾルーゲル法関連の発表は「材料」会場以外にも散見された。「触媒」（シリカ担体、バナデート・ガラス等）、「ミクロスフェア」（シリカ・マイクロバルーンなど）、「超伝導」（ゾルーゲル法による YBC の合成—防衛大化・垣花等、Bi 系超伝導ガラスセラミックファイバーの特性—長岡技科大・小松等）など。なお筆者の聞きもらした重要な発表もあったことと思う。

一般研究発表のほか、特定テーマによる特別講演会（筆者には「STM の進歩とこれからの可能性」に興味があったが、「材料」会場での座長の時間と重なったりして一部聴き逃した）、受賞講演会、通常総会、科学機器メーカーなどによる展示会、研究機関や企業を紹介するポスター形式の交流コーナーなどもあり、それぞれ観衆を集めていた。また主に高校生を対象とした講演会「化学への招待」が例年の様に企画され、本年は予定の 2 倍以上の参加希望があり（事前登録による）2 回に分けて各約 100 人の高校生が熱心に聴講していたことが注目される。なおテーマは有機合成化学と高分子化学であった。

「材料」会場は約 400 人収容の大教室であったが、聴衆は 50~80 人程度と少なめであった。多くの発表後に制限時間（3 分）を越える質疑応答が行われていたことから、低調な印象は少なかった。しかし質問者は一部に限られ、広い分野の研究者が集まって意見を交換するといった雰囲気ではなかった。別会場で行われた「超伝導」セッションなどは低調で、会場外で談笑する人の方が多いといった光景も見られた。またある会場の遅い時間の



セッションでは聴衆3人ということもあった。ある参加者の言葉のように「年会」は「お祭り」で「参加すること」に意義があるというのでは、このような大規模な年会の存在意義に疑問を抱かざるを得ない。

〔筆者紹介〕

平島 碩 (ひらしま ひろし)  
昭和41年 慶応義塾大学工学部応用化学科卒業  
昭和44年 同 助手  
平成2年 同 理工学部 教授  
工学博士。

〔連絡先〕

〒223 横浜市港北区日吉3-14-1  
慶応義塾大学理工学部応用化学科  
TEL 045-563-1141